

あらた同窓會

令和5年 秋季号

令和5年11月23日発行

鹿児島大学農学部
あらた同窓会
学生会員向け会報

電話 099-285-8537



農学部附属農場・学内農事部のヒマワリ（令和5年7月）





教育学部附属幼稚園児が田植え・稲刈り体験の一環として作った附属農場水田の案山子（令和5年10月）



附属農場・学内農事部におけるトルコギキョウの採取・収穫実習（令和5年10月）

目 次

1. 巻頭言 志(信念)、継続と努力、そして応援団藤 田 晋 輔 2
2. 鹿児島大学農学部の大偉大な植物学者.....寺 岡 行 雄 3
3. 令和6年度から農学部の新たな教育体制がスタートします.....濱 中 大 介 4

ビバ・キャンパスライフ

●農業生産科学科

4. 応用植物科学コース
「人としての器」.....害虫学研究室 学部4年 大 峯 綾 乃 5
5. 畜産科学コース
「サークル活動を通して」.....家畜育種学研究室 学部4年 馬 庭 希 生 5
6. 食料農業経済学コース
「大学生活を振り返って」.....農林水産学研究科 農業経営学研究室 修士2年 永 坂 真 愛 6

●食料生命科学科

7. 食品機能科学コース
『自分の核をつくった5年間』.....農林水産学研究科 生分子機能学研究室 修士2年 肥 田 祐 輔 6
8. 食環境制御科学コース
「自分のしたい事」.....植物栄養・肥料学研究室 学部4年 皆 元 和 槻 7
9. 焼酎発酵・微生物科学コース
「オーケストラとの出会い」焼酎製造学研究室 学部4年 矢 野 琴 美 7

●農林環境科学科

10. 森林科学コース
「Joining a sophisticated education and a civilized society can develop your thoughts.」
農林水産学研究科 育林学研究室 修士1年 Hassan Ibrahim Hassan(ハッサン イブラヒム ハッサン) 8
11. 地域環境システム学コース
「20歳にして初海外旅行記」.....農業環境システム学研究室 学部3年 東 畑 有 紀 8

●国際食料資源学特別コース(農学系サブコース)

12. 「初めての留学」.....植物栽培・機能学研究室 学部3年 金 範 求 9

教育実習奮闘記

13. 「教育実習の挑戦と教育の未来」.....農業生産科学科 果樹園芸学研究室 学部4年 尾 崎 香 澄 10
14. 「教育実習を終えて」.....食料生命科学科 応用分子微生物学研究室 学部4年 長 岡 杏 摘 10
15. 「教育実習を終えて」.....農林環境科学科 砂防学研究室 学部4年 江 口 泰 斗 11

インターンシップ体験記

16. 「インターンシップ体験記」.....農業生産科学科 家畜繁殖学研究室 学部3年 厚 地 真 実 11
17. 「インターンシップを終えて」.....食料生命科学科 植物栄養・肥料学研究室 学部3年 木 村 仁 美 12
18. 「インターンシップを振り返って」.....農林環境科学科 森林計画学研究室 学部3年 湯 浅 敬 太 郎 12

介護体験記

19. 「介護体験を終えて」.....食料生命科学科 生分子機能学研究室 学部3年 久 保 未 結 13
20. 「介助技術の学びと実践について」.....農林環境科学科 環境教育学研究室(附属演習林)
学部3年 永 原 拓 也 13

留学体験記

21. 「米国への研究留学と国際学会を経て」.....農林水産学研究科 家畜育種学研究室(食肉科学研究室)
修士2年 萩之内 竹 斗 14
22. 「タイの好きなおとこ」.....農林水産学研究科 熱帯作物学研究室 修士1年 藤 本 夏 央 14

- 編集後記..... 16



志（信念）、継続と努力、そして応援団

鹿児島大学農学部あらた同窓会
会長
藤田 晋 輔

猛暑続きの夏でしたが、朝晩は秋の気配を感じるようになりました。令和5年4月入学の皆様、「新型コロナ」で息が抜けなかった高校時代、収束宣言が出された1～2月の入学試験も終わり、春爛漫の候、子供の頃からの「志」を全うし、晴ればれした気持ちで、鹿児島大学農学部に入學されたことでしょうか。既に、半年が過ぎました。俗に言われる「5月病」も乗り越え、夢描いた目標に向かって、充実した日々生活を送っていることでしょうか。目標とした内容がマッチしていますか？秋季号は「**ビバキャンパスライフ**」など、学生の皆さん向けに編集されています。4年次、大学院修士課程諸君が多くの活動の場で、失敗も含めた多彩な経験を伝えてくれることでしょうか。ぜひ現役の先輩達の名言・提言を探しだし、今後の参考にしてください。2、3年次の皆さんは農学系だけでなく、多分野の幅広い礎を深め、充実した目標になっていることでしょうか。4年、大学院2年生の皆さんはこれからの半年間「今まで培ってきた成果を再度疑う眼を持ってまとめ、より深めること」が大切な時期です。成果が楽しみですね。関連学会での発表ができれば、今後のキャリアアップの時代、この上ないことです。

さて、「一念は天に通ず」や「継続は力なり」と言う諺があります。これを終生実行した高知県生まれの植物学者牧野富太郎（1862～1957）を描いた「NHKの朝ドラ」も9月で終わりました。彼は子供の頃の「志」を独学により植物分類学だけでなく、鉱物学をはじめ、多くの分野を含めて77歳まで大学教員生活、そして研究者としても94歳まで究めています。類似した分野である林学を学んだ私は、明治初期、草創期の大学や研究者の行動や社会背景も含めて、楽しみながらドラマの展開を視聴しました。彼は子供の頃、草本を中心とした植物に興味を持ち、東京帝国大学理科大学がまだ成熟していない黎明期に門をたたき、生涯を通して「日本の植物学の父」と呼ばれ、植物分類学を究めています。研究に対して「継続」することは、したたかであれば、生涯続けられるものではありません。約80年を越える年月、約50万点もの標本や観察記録を残し、1,500種以上の新種に命名しているのです。もちろん、採集と標本作成には莫大な時間と資金が必要ですが、己だけの「根気と努力」だけで出来るものではなく、「理解者と協力者」がなければ、成就できることではありません。

1908（明治41）年鹿児島高等農林学校創設時の植物標本の採集、整理の草分けは、河越重紀教授（東京帝国大学農科大学農学科卒）ですが、以降林学科の内藤 喬教授が引き継ぎ、その後、初島住彦教授・迫 静男講師が引き継がれました。私の学生時代（林学科）を含め大変お世話になった先輩であり、大恩師です。植物採集、標本作成し、樹木を中心とした完成標本は終生10万点以上になっているそうですが、代々の林学科の卒業論文専攻生達の協力も大きいと考えています。私も学生時代植物採集に帯同し、標本作成の補助をする等、多くの体験をしました。特に初島先生は数ヶ国語が堪能で、大学院受験の際、ドイツ語の研究論文読破まで指導いただきました。現在では、鈴木英治特任教授（国際島嶼教育研究センター）が主体となり、鹿児島県内の植物研究者である丸野勝俊先生、長内利明先生等のサポートにより、益々充実しています。総合研究博物館が所蔵する植物標本蒐集数は約18万点以上あり、すでに約15万点がネットで閲覧できるそうです。興味ある方は総合研究博物館常設展示館で是非実物を見てください。

最後に、鹿児島大学農学部あらた同窓会は、約21,000名（内、物故者は約5,000名）を越える先輩達が皆さんからの相談を待っています。国内各地には支部もあり、本部との連携も上手く取られています。私も卒業後、京都府、島根県、静岡県、そして鹿児島県と4ヶ所の地に居住しました。それぞれの地の先輩を訪問しますと自分の事のように喜んでいただき、他の学部の先輩にまで連携して貰い、解決困難な事項まで解決できた経験が何回となくあります。皆さん、是非、積極的に同窓会を利用されることを期待しています。

鹿児島大学農学部の大偉大な植物学者



農学部長
寺岡行雄

個人的趣味もあって恐縮ですが、NHKの朝ドラ「らんまん」が楽しい朝の時間を提供してくれました。皆さんは視聴されたでしょうか？ドラマの主人公は高知県出身の植物学者榎野万太郎ですが、実在の植物学者牧野富太郎であることは多くの方がご存じかと思います。植物を扱う農学部のたいていの研究室には、牧野富太郎が著した「牧野日本植物図鑑」があるのではないかと思います。植物の学名を確認する際には、牧野日本植物図鑑をまず手に取るのではないのでしょうか。かつて高知県立牧野植物園を訪問し、ドラマで描かれたように、裕福な実家の支援を受けて植物学の研究を行っていたことを展示で知りました。植物園には牧野に縁のある植物が見事に展示されています。植物を扱う農学部の皆さんは、機会があれば訪ねてみてはどうでしょうか。

さて、鹿児島大学農学部で学ぶ皆さんにぜひ知っておいていただきたい先生がおられます。農学部旧林学科で植物学を教えておられた初島住彦名誉教授です。「(開学100周年記念誌)あらた百年の歩み」に細山田三郎先生(元教育学部教授)が寄稿されており、そこから紹介したいと思います。初島先生は1906年に長崎県島原市に生まれ、鹿児島高等農林学校を卒業後、九州帝国大学に進学されました。1942年に九州帝国大学で農学博士の学位を取得され、1943年11月からインドネシアのボゴール植物園に勤務。戦後は1948年4月から鹿児島大学農学部教授として1972年の定年まで勤務され、在職中は九州南部から南西諸島の植物の解明に尽力されました。鹿大をご退職後、琉球大学理工学部(現理学部)へ教授として3年間赴任され、ご退職後も南日本の植物研究と教育に尽力されました。その間に80種を超える新種や変種の発見をなされ、初島先生の名前を冠するハツシマランやハツシマカンアオイをはじめとして、10万点を超える九州南部や奄美、沖縄などの植物標本は「初島コレクション」として世界的に著名で、鹿児島大学の貴重な財産となっています。

2008年1月に101歳でお亡くなりになるまで、元気に植物の研究を続けられたとのこと。私自身は初島先生のご指導を受けることはできませんでしたが、1976年に出版されました「日本の樹木」で樹種同定や学名の確認に使わせていただきました。鹿児島大学農学部にも偉大な植物学者がおられたことを皆さんにも知っておいて欲しいと願っております。



初島住彦先生：平成18年9月11日
100歳の誕生日(自宅にて、南日本新聞取材中)

令和6年度から農学部の新たな教育体制がスタートします



学部改組ワーキング
グループ担当
濱 中 大 介

農学部では、学部教育の新時代への対応とさらなる充実を目指して学部を改組し、令和6年4月より

新たな教育体制がスタートします。これまでの3学科体制（農業生産科学科、食料生命科学科、農林環境科学科）から、1学科（農学科）・4プログラム（植物資源科学、環境共生科学、食品生命科学、農食産業・地域マネジメント）・1コース（国際食料資源学特別コース）体制となります。入学定員は、畜産科学コースが共同獣医学部と合流して共同獣医学部・畜産学科となることに伴って、現在の205名から175名となります。

農学部を取り巻く社会情勢は、これまでにないほど急速急激に変化しています。SDGsやSociety5.0への対応のみならず、地球規模で発生する気候変動や食料危機等への対応、さらには、関連産業を支えて地域を活性化するといった地域特有の課題解決の中核的存在として、新時代に向かって力強くけん引することができる人材を育成・輩出することが求められています。これまでも農学部では、日本で有数の食料基地に位置する鹿児島において、温帯から亜熱帯へ南北600kmにも及ぶ多様な自然環境を背景にフィールド教育を重視し、豊かな人間性と現場での実践力や応用力、広い視野と国際性を持った、新しい時代に向けた創造性豊かな人材の養成に努めてきました。しかしながら、担い手不足や耕作放棄地、林業事業地確保の困難さ、土砂災害などの防災意識の向上、スマート農業やDXなどの新技術開発の必要性、環境・生活・文化の多様性への配慮の必要性など、地方に位置する農学部として積極的に取り組み、解決しなければならない課題が山積しているのが現状となっています。

このような課題を解決すべく、①初年次の動機付けと将来の資格・職種を意識した「農学キャリア教育」、

②「1学科4プログラム制」による農学総合力と専門性を併せ持った人材の育成、③南北600kmをフィールドとした実践教育と高度な専門知識の修得の両立、を今回の改組の目標としました。

農学部は、非常に多岐に亘る専門分野で構成されています。それは即ち、卒業後に目指す将来の姿も多岐に亘ることを意味しています。これまでは、学科やコース毎に提示された幾つかの典型的なカリキュラムに沿って受講し単位を取得すれば卒業できましたが、今後は必修単位数を大幅に減らしたことで選択肢が増えることになります。学生自身が「何を学び、何を身に付けるのか」という将来の目標を常に意識しながら、主体的に自分自身のカリキュラムを作ることになります。学生は、目指すべき目標に対して、学びの計画と振り返りをキャリアマップによって自己評価し、PDCAを意識して「目標」に対する“現在地”を確認しなければなりません。講義においても、資格や就職、養成される能力が明確となるように関連する講義群をグループ化して提示します。また、対面での受講が基本ですが、ほとんどの講義でオンライン・オンデマンド教材を準備することで、遠隔地への実習や海外留学先からも受講できる体制を整備します。さらに、実験・実習を除く講義科目には受講制限を設けず、農学全般の幅広い知識と俯瞰的な視野を身に付け、主体的かつ積極的に農学関連の課題を解決できる人材を育成する体制とします。

今回の改組では、学科の統合、畜産科学コースの共同獣医学部との合流、キャリア教育の導入といった、これまでにない大きな改革を行うこととなります。現代の激動する社会においても、身に付けた確固たる専門知識と、総合的・俯瞰的視野を以て、関連分野における様々な課題に対して積極的・主体的に解決に取り組むとともに、鹿児島地域のみならず、日本全体、あるいはグローバルに活躍できる人材の育成に取り組んで参ります。

令和6年4月以降の新教育組織

農 学 部	農 学 科	●植物資源科学 PG：先進技術による植物資源の生産と活用を実現
		●環境共生科学 PG：生物多様性の保全と農林産物の生産活動が調和した持続的発展を実現
		●食品生命科学 PG：生物資源を分子・細胞・生体レベルで解析し食の発展と健康に貢献
		●農食産業・地域マネジメント PG：経営・経済学観点から農食産業と地域の持続的発展に貢献
		◆国際食料資源学特別コース（変更無し）



農業生産科学科

応用植物科学コース



「人としての器」

害虫学研究室
学部4年 大峯 綾乃

日中は強い日差しが差し込み、吹き込む風は肌寒いと思わせるほど秋めく今日。大学生活が残り少ないと感じさせられる季節になってきた。大学生活についての執筆依頼を頂いたので、自分にとって一番大学生活を形成したものを考えた結果、それは塾講師のアルバイトだった。

4年間をアルバイトに費やしたといっても過言ではないが、入学最初から塾講師をしようと思っていたわけではない。更に言うなら、最初は映画館のアルバイトに申し込んでいた。しかし、人生で初めてのアルバイト面接に落ち、やけになって夜中に面接を申し込んだのが現在もなお続けている塾講師だ。始まりは適当でも今ではこのような文章を書くほど感謝しているのだから人生は面白いと思う。

塾のアルバイトを始めてからは、生徒が自分の思うように行動してくれないことにイライラすることが多かった。なぜ宿題をしてくれないのか、英単語を覚えてくれないのか、授業態度が悪いのか…イライラが重なり塾長への授業報告で号泣することも多々あった。こんなにしんどいなら…と何度もアルバイトを辞めることを考えた。それでも今まで続けていられるのはその度に塾長や同僚、後輩に助けられ、助言をもらって成長できたからだ。

アルバイトでは一言で語れないほど本当に色々なことを学ばせてもらった。コミュニケーション力、社会人としての基礎能力、困難にぶつかったときの考え方、、、出し尽くせないほどあり、その全てを学んだ結果、「人としての器」を大きくできた。私が考える「人としての器が大きい人」とは、何事にも寛容で長い目で物事を捉えることができ、人を責めずに自分事

として考えることができる人である。大学1年生のイライラしていた頃に比べれば今では理想像に近づくことができていると強く思う。

今年で最後の受験生を笑顔で送り出し、後悔なく理想の社会人として活躍するために3月まで全力で生徒指導に励んでいくつもりだ。

畜産科学コース



「サークル活動を通して」

家畜育種学研究室
学部4年 馬庭 希生

私は、大学2年生から卓球同好会というサークルに入りました。1年次はリモート講義がほとんどで、実家通学だった私は大学に行く機会がほとんどなく、サークルのためだけに電車で1時間かけていくのも面倒だと思いサークルには入っていませんでした。しかし、2年生になると対面講義が徐々に増え、大学に行くことも多くなりました。せっかく大学まで行くなれば、1年次に行わなかったサークルに加入して、大学生生活を楽しもうと思ったことが卓球同好会に入ったきっかけです。

私は同期より1年遅れて加入したため、みんなの輪に入ることができるか初めはかなり不安でした。しかし、同期も先輩方も優しい人ばかりで、気づいたときにはサークル活動以外にも共に過ごすようになっていきました。3年生になって一人暮らしを始めてからは、今までの反動がきたのかサークル仲間と共に過ごす時間がぐっと増え、間違いなく今までで一番楽しかった1年間になりました。

それだけでなく、私にとってサークルは自分自身を成長させる場にもなりました。サークル関係の大会で実施関係者になった私の主な役割は、大会に出場するメンバーの登録や参加費の徴収でした。これまでオンラインで選手登録をしたり、全員分の大会参加費という大金を任せられたりした経験がなかったため、初めはかなり緊張しましたが、先輩や同期の助けを借りながらミスすることなく自分の役割をやり切ることができました。

大学の友達は一生の友達とよく言われますが、私にとってそれが本当のことなのかはまだ分かりません。しかし、卒業してそれぞれが異なる地で就職すること

(6) あらた同窓会学生向け会報

になったとしても、この繋がりは絶対にとどめておきたいと思える仲間に出会いました。

これから先もこの繋がりを大切にしていきたいと思います。

食料農業経済学コース (農林水産学研究科・農林資源科学専攻 ・食料農業経済学コース)



「大学生活を振り返って」

農業経済学研究室

修士2年 永坂 真愛

以前までの私は、行動を起こせずに、後悔することがよくありました。そんな自分を払拭すべく、大学生活でいくつか挑戦したことがあります。

1つ目は部活です。1年の時は、ただ講義に出て課題をしたり、サークルに入ったものの活動に参加しなかったりと、あまり楽しい日々ではありませんでした。今までの与えられる環境とは異なり、受け身ではいけないと感じ、2年になってバドミントン部に入りました。知人がいなかったことや、週4の練習についていけるかなど不安もありましたが、入部後は今までの不安は何だったのかと思うくらい楽しく活動できました。今では、入部しなかったらどうなっていたのだろうと思う程、充実した日々を送ることができました。時間的に忙しくなった一方、時間の使い方を考え、やるべき事とやりたい事の両方に今まで以上に励むことができました。

2つ目は学科のコース分けです。私は元々決めていたコースではなく、少しの興味から食料農業経済学コースを選びました。経済学に関して、今まで学ぶこともなく、どちらかという避けてきた分野だったため、最初はただただ難しく感じていました。しかし、宿泊での実習や、対面でのインタビュー調査などを通し、面白みを感じ、もっと学びたいと思うようになりました。不安が大きかった選択でしたが、自分の学びたいテーマも見つけ、飛び級の資格も得ることができ、大学院にも進学できました。大学院では、周りのレベルの高さ故に、ついていくことで精一杯でしたが、先生方や先輩方、同級生に助けをいただきながら、学ぶことができました。また、研究室では留学生と過ごす時間も多く、英語での会話やベトナム料理を

振る舞ってくれた時もあり、とても新鮮で刺激的な日々を過ごせました。

簡単な事と感じる人もいるかもしれませんが、心配性で行動を起こせなかった自分にとっては、大きな変化でした。この大学生活で挑戦心や行動力を身につけることができたと思います。

食料生命科学科

食品機能科学コース (大学院農林水産学研究科・食品創成科学 専攻・食品機能科学コース)



『自分の核をつくった5年間』

生分子機能学研究室

修士2年 肥田 祐輔

この場を借りて、ここまでお世話になった先生方、そして、関わってくださったすべての方々にお礼を申し上げます。

僕の大学生活は、医学部を受験して落ちたところから始まりました。

医学部はレールが引かれていたが、農学部は自分で草を刈って道をつくっていくしかない。何でもできる分、自分が何をしたいのか問われる環境でもあり、少なくとも3年間は自分のやりたいことを探し続けました。

そして、幸運なことに、大学生のうちに熱中できることに会うことができました。

今思えば、大学1年のときに、自然体験・環境教育のサークルに入ったことが原点だったなと思います。当初は、『川で遊びたい!』という思いで、緊張しながら先生に話しかけたことを覚えています。

高校時代までの僕のすべては、偏差値や学歴でした。自分が出した価値で自分の価値が決まると強く信じていました。しかし、それは社会的な基準にすぎず、自分規準で人生を楽しんでいる人たちと出会って、憧れと劣等感が生まれました。そこから、自分にやりたいことをやらせてあげようという考えに変わっていきました。

さらに、鹿大生としての生活の中で『グローバル』という言葉と出会い、この方向性を目指したいと思い

ました。思考を発散させたうえで、行動として地域に収束させていく。大きな一石を投じるより、いろんな人と一緒に小石を投じる『コレクティブインパクト』を目指す。自分起点で日本や世界をよくするには？ということ日々考えています。

研究に励む大学院生としては、お手本になれるような姿ではなかったと思いますが、自分規準では『鹿児島大学に入ってよかった。』と思えています。

改めて、お世話になったすべての方々に感謝を申し上げます。

最後に自戒の念を込めて、大切にしている言葉を置いて、この文章を締めたいと思います。

『置かれた場所で咲きなさい』

食環境制御科学コース



「自分のしたい事」

植物栄養・肥料学研究室
学部4年 皆元 和楓

この機会に自分の大学生活を振り返ると、自分は周りの人達に本当に恵まれ、助けてもらってきたと感じます。大学は、自分の専門分野はもちろん、人との付き合い方や考え方など、多くの刺激を得られる場だと思っています。

今回はその中でも2つの時期に絞り、皆さんに感謝を伝えさせていただきたいと思います。

1つ目は、アルバイト時期の出会いについてです。そこでは沢山の尊敬する先輩方や後輩たちと出会い、多くの経験をさせていただきました。1本筋の通った頼れる先輩方、多くの考え方や着眼点のある後輩たち、他のアルバイトでは得られなかった経験もできたと思います。紹介してくれた友人に本当に感謝しています。後輩として、そして時間を経て、先輩として働くという経験は、働くという行為に対してのそれぞれの姿勢や価値観の違い、社会の一員として働く際の考え方を学べました。

2つ目は、公務員試験の期間中についてです。

公務員試験は孤独との戦いだとよく聞きます。しかし、私は、研究室の先生方、先輩方、友人、家族の全面協力のおかげで、最後まで取り組むことができたこと感謝しています。毎日大学に来て、目標は違えど、勉強に励み、日々成長しあえた友人には、気持ちが折れ

てしまいそうな部分を補ってもらったと感じています。

関わってくださった皆さんのおかげで「やりたい事を見つける」という、自分が大学に入学した目的の1つを実現できました。

卒業し、就職するにあたって、「私のやりたい事」は、自分という人間はこれまで関わってくれた人たちのおかげで成り立っているということをお忘れず、今まで受けた恩を少しずつでも誰かに還元していけるような社会人生活を送ることだと考えます。

最後に、家族、友人達、先輩、後輩、先生方、私が感謝を伝えたい人は多すぎるので。最高に楽しかったと思える大学4年間は、あなたのおかげで過ごすことができました。本当にありがとうございました。

焼酎発酵・微生物科学コース



「オーケストラとの出会い」

焼酎製造学研究室
学部4年 矢野 琴美

私は大学でオーケストラに所属し、ヴィオラ奏者として活動しました。小学校から高校までソフトテニス一筋でしたが、大学に入って新しいことに挑戦したいと思い、幼少期から憧れていた弦楽器のヴィオラを始めました。初めての音楽は全てが新しく楽しく、毎日夢中になって練習しました。また、コロナ禍で様々な制限がある中で、サークル活動が人との繋がりを途切れさせず濃いものにしたと感じています。

特に、オーケストラは約60~100名もの奏者が揃うことにより演奏が成り立つため、先輩や後輩、OB、プロの指揮者と奏者など多くの人と関わる機会があります。そのため、高校までの、どうしても友人や先生で留まってしまうような限られた人間関係から、大学では性別や年代を問わない幅広い人間関係へと変化しました。関わりの中で知識や経験が身についたのはもちろんですが、物怖じせず大人と話せるようになったことが一番の収穫だったと感じています。

また、楽団では主将を務めました。奏者とは違う大変さがあり、演奏会に向けての膨大な準備と打ち合わせで心が折れそうになったこともありましたが、周囲の友人や先輩に助けられながら無事に演奏会を成功させた経験は何事にも代えがたいと思っています。演奏

(8) あらた同窓会学生向け会報

中の、「このまま曲が終わらなければいいのに。」と思うほどの一体感と終演後の達成感は今でも鮮明に覚えています。

感染症に翻弄された大学生活でしたが、好きなことに全力で取り組み、自分自身が人として成長できた充実した4年間となりました。そしてなにより、生涯大切にしたいと思える楽器と尊敬する人たちに出会うことができました。かけがえのない経験を胸に、今後は社会人として努めていきたいと思えます。

農林環境科学科

森林科学コース
(大学院農林水産学研究所・農林資源科学
専攻・森林科学コース)



[Joining a sophisticated education and a civilized society can develop your thoughts.]

育林学研究室

修士1年 Hassan Ibrahim (ハッサン イブラヒム ハッサン)

The initial six months of my tenure were dedicated to intensive preparation as a research student within the laboratory of silviculture. This period proved to be immensely enriching, as it facilitated my acquisition of valuable knowledge and concepts pertaining to the scientific research process and the effective utilization of laboratory materials that were previously unfamiliar to me. After completing the initial six-month period, I was officially enrolled as a student at Kagoshima University's Graduate School of Agriculture, Forestry, and Fisheries in April 2023. Since then, I have been actively attending classes and making progress in the development of my thesis research.

In our laboratory, the daily activities run smoothly, with all students dedicated to their studies and fostering a cooperative and forest environment with research experiments. As a result, our relationships are characterized by a strong sense of positivity and mutual support. Through the experience of working collaboratively, I have studied essential values such as **punctuality, diligence, and a commitment to hard work**. Moreover, being in an environment where

extensive reading and long hours in the laboratory are the norm has necessitated a shift in my thinking and learning style. I have adapted to this reading-intensive approach, which has transformed my previous learning habits. Additionally, regular seminars are held on Thursdays, providing a consistent platform for academic exchange and intellectual growth.

Furthermore, within the context of our laboratory's emphasis on forest management, specifically the control of forest growth and quality, I have actively participated in numerous research trips. These field excursions encompassed a range of tasks, including **root and soil sampling, leaf collection, weeding, tree diameter and height measurements**, as well as the application of chemicals using various methods and instruments. Notably, these surveys were conducted in significant forest areas such as **Takakuma Forest, Kyushu Forest, and Hokkaido Forest**. Engaging in these activities has provided me with valuable insights into the fundamental concepts surrounding the importance of forests and their essential protection for the ecosystem, as well as the critical aspects of evaluating research sites and making informed selections.

Conclusion

As an international student from Somalia at Kagoshima University, my experience has been fruitful. I acquired research skills during the preparation period and have made progress in my thesis research since enrollment. The cooperative atmosphere of the laboratory has facilitated adaptation to a reading-intensive approach and participation in enlightening research trips.

地域環境システム学コース



「20歳にして初海外旅行記」

農業環境システム学研究室

学部3年 東畑 有紀

大学3年間で振り返ると、やはり私の中での一大イベントは初めての海外旅行だと思う。知り合いの家に

ホームステイをさせてもらい、大学2年生の時に夏休みの1ヶ月間を利用してアメリカのコロラドスプリングスへと赴いた。コロラドスプリングスは観光名所として有名で「スプリングス」と名が付くとおり、街には7つの泉が湧き出るスポットがあり飲むことが可能だった。ちなみに飲んでみると鉄分を含んだ炭酸水の味がした。健康になれるだろうが2度飲むことは遠慮したい味だった。

本当に様々な体験をした。砂丘へ登り滝へ行ったり、本場のコストコの広さに慄いたりした。滞在している間は夕食は全て私が作っていたが、肉の厚さや魚の少なさに驚きながら日本食を振舞った。もちろん外食もたくさんした。溢れ出るほどのチーズバーガーも、子供の時に夢見た肉のみを詰め込んだサンドイッチも、濃厚すぎるアイスクリームも食べた。とくにアイスクリーム屋さんは3軒毎に並んでいるほど、アメリカに住む人にとったら重要らしい。食べ比べが楽しかった。

しかし、実は私が1番印象に残った思い出は空港である。私は海外の空港を有り体にいえばナメていたのである。まず、広すぎる。本当に広い。ターミナルからターミナルを移動するために空港内に電車が通るとは想像もしていなかった。搭乗口も遠すぎる。そして何よりも私は英語が話せるわけではないため、いざ搭乗しようとした時とても緊張した。実はこの搭乗口は間違いでアフリカに行きますと告げられたらどうしよう、現地で売り飛ばされたら買い戻してくれと親に半ば真面目に告げるくらい緊張していた。もちろん、そんな事はなくつつがなく現地に到着した。

また海外へ行きたいと思う。次の目標は入国審査の時に審査官にからかわれないぐらいの英語力を身につけて訪れることだ。



国際食料資源学特別コース(農学系サブコース)



「初めての留学」

植物栽培・機能学研究室

学部3年 金 範求

私は韓国の高校を卒業した後、すぐに国際食料資源学特別コースに入学した。入学した直後の自分の気持ちを思い出すと、一言で怖かった。今まで自分が生活したところを離れて他国で留学生活を始めることと、頼れる知り合いがいないという不安感が自分をさらに不安にさせた。また、日本語は高校3年生の時に、日本で言うところの、日本語学校のような組織で勉強した。そこでは、留学生試験対策として、いつも、日本語を韓国語にすぐに翻訳できるような練習ばかりをしていた。その結果、その時の私は日本語のリスニングとリーディングだけはできるようになっていた。留学生試験では、スピーキングがないので、漢字の意味は見ればすぐに分かるまでに上達したが、発音はできないという状況であった。共通教育の授業でも、この点がネックとなった。しかし、このような不安感は時間が経つにつれて徐々に消えていった。この一番大きなきっかけは、私が国際コースに入学したということだ。同じコースに入学した同期生たちは外国人に対する興味がある程度あり、外国人を避けようとする傾向もなかった。ここで、今までもいっしょに旅行も行くほど大切な友達ができたと感じた。この友達は、私のつたない日本語会話を隣にいて、いつも助けてくれた。私の会話能力は急激に上達し、日本で生きていける会話力を身につけることができた。始まりは恐かったが、今は大満足である。鹿児島大学に入学して私の専攻知識はもちろん人を眺める視野も広がったことを感じることができる。過去には留学を恐れた私だが、現在の私は日本の他の地域だけでなく他の国にも留学してみたいと思っている。考え方の範囲を広げてくれた初めての留学の場である鹿児島大学と国際コースに感謝の気持ちを伝えたい。

メモリー

～進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談～

教育実習奮闘記



「教育実習の挑戦と教育の未来」

農業生産科学科 応用植物科学コース
果樹園芸学研究室
学部4年 尾崎 香澄

教育実習は私にとって非常に価値のある経験でした。この実習を通じて、子供たちの学校教育について多くのことを学びました。

最初に印象的だったのは、教育現場がどれだけ多様で複雑な環境であるかということでした。教師は、単に教科指導だけでなく、生徒たちの異なる背景や学習スタイルに対応し、適切な指導方法を提供することが大切です。教科の指導はもちろん重要ですが、それ以外にも生徒指導、学級経営、地域との連携、保護者とのコミュニケーションなど、広い視野とマルチな能力が求められることを実感しました。

また、教育実習では生徒たちとの関係構築も重要な側面でした。初日には、自分が上手く話せるか、生徒たちは私の話を受け入れてくれるかという緊張感がありました。しかし、生徒たちも同じように緊張しており、自分からコミュニケーションをとることで生徒たちとの信頼関係を築くことができました。信頼関係があることで、生徒の少しの変化に気付いたり、大きな悩みになる前に相談できるようになることを学び、子供たちとのコミュニケーションや理解が、教育の鍵であり、欠かせない要素であることを実感しました。

この教育実習を通じて、将来のキャリアに関わらず、教育が社会において非常に重要で多面的な役割を果たしていることを理解する機会となりました。子供たちの学びと成長を促進するために、教師が持つべきスキル、使命感、職責感、価値観についての洞察を得ることができたことは、私にとって非常に意義深いものでした。

教育の現場は日々進歩し、時代の変化に対応できる力を生徒に求めています。未来を創りあげる子供たちにはどのような力が求められているかを理解し、大人たちは共に支える役割を果たす必要があります。同時に、今の社会を創りあげる私たちも絶えず学び続け、

子供たちが希望を抱ける社会を築く役割を果たす必要があると強く感じました。



「教育実習を終えて」

食料生命科学科 焼酎発酵・微生物科学コース
応用分子微生物学研究室
学部4年 長岡 杏摘

私は、2週間、母校である長崎県立壱岐高等学校へ教育実習に行ってきました。ここでは、私が教育実習を通して感じたことについて話します。

教育実習初日、校門をくぐるのは楽しみよりも不安や緊張の方が大きかったです。職員室、担当教室、授業見学の教室へ挨拶に行くとそれだけで1日が過ぎていったと感じるくらい慌ただしかったのを覚えています。それ以上に印象的だったのは生徒たちが私を快く迎えてくれたことです。2週間をより充実させようと思えたスタートでした。

学校について、私の高校時代と大きく変化していたことは、1人1台タブレットを持っていることです。課題などの連絡はメールで先生からデータをもらい、提出もメールで行う場面が多々あり、大学生と変わらないと思いました。コロナ禍を経験して、さらに学校の体制がめまぐるしく変化していることに驚かされました。

この実習で、立場の違う人に伝えることは難しいと強く感じました。普段の大学生活において、何も知らない人に1から物事を説明する機会は少ないです。よって、生徒へどう教えるかとても悩みました。先生の助言や授業見学を通して、生徒が興味を持ちやすい話題を取り上げることや言葉の選び方、抑揚など、1つ工夫するだけで生徒の反応が良くなるとわかりました。実際に、授業内容と自身の大学での研究を結びつけて授業を構成してみると、生徒の食いつきが良かったです。同時に、人に伝える楽しさも感じました。私の母校は離島なので、大学進学を機に一人暮らしを始める人がほとんどです。皆大学生活について興味津々で話を聴いてくれました。生徒が少し先の自分の姿を想像できる機会になったのであれば嬉しいです。

ここに書き切れないほどの経験をし、いつもと違う場所に身を置くことで自分の成長にもつながりました。この経験は、教育現場でなくとも私の将来に生きていくと思います。実習先に感謝し、次のステップに向けて頑張っていきます。



「教育実習を終えて」

農林環境科学科 地域環境システム学コース
砂防学研究室

学部4年 江口 泰斗

私は今夏、物理の教育実習生という立場で出身高校に帰った。高校を卒業してから初めて訪れた母校は、創立100周年に向けた記念事業の一環として校舎の建て替えが進んでおり、高校時代を過ごした当時の面影が失われつつあった。馴染みのない新しい校舎に緊張しながら指定された教室へと向かったが、そんな緊張は杞憂で、高校時代にお世話になった多くの先生方が徐々に顔を見せた私を温かく迎えてくださった。先生方が私のことを覚えて下さっていたことが単純に嬉しかった。

教育実習で一番感動したのは、いわゆる落ちこぼれの生徒だった私が堂々と職員室に出入りできるようになったことだった。高校生の時は先生からの呼び出しでしか職員室に行く機会がなかったので、当時は全く想像ができなかった状況だ。そういった状況の違いから、学生ではなく教師の立場でこの場にいるという自覚が芽生え、自然と気持ちが引き締まった。

教科指導で担当したのは高校2年で習う万有引力の内容だった。スケールがいきなり宇宙規模へと広がることで事象のイメージがしづらくなり、指導教官ですら「教えるのが難しい」とおっしゃっていた内容を授業4回分という制限の中で指導しきったことは自分の中で大きな自信となった。

教育実習を通して、教師という職業の本質を身をもって理解し、これまで抱いていた教師へのイメージが表面的だったことに気づかされた。人にものを教えることの難しさを知り、授業準備にかかる時間の膨大さ、教材研究の大変さを知った。また、自分に教師としての適性があるのか否かについても確認することができた。大学卒業後は教師とは関係のない職業に就くことが決まったが、今回の教育実習の経験やこれから取得する予定である教員免許の存在は、自分の人生においてプラスに働いていくものであると考えている。4年間の教職課程は簡単なものではなかったが、その分学生生活を充実させる良い経験となった。

インターンシップ体験記



「インターンシップ体験記」

農学部農業生産科学科 畜産科学コース
繁殖学研究室

学部3年 厚地 真実

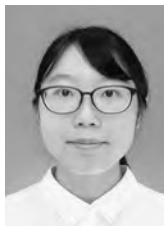
私は今回、自分が大学で得た知識がどれほど通用するのか、大学で学び始めるまで気にも留めて来なかった地元の畜産の現場がどのようになっているのかを知りたい、などの理由から、熊本県畜産農業協同組合連合会（以後、県畜連）にて研修をさせていただきました。

県畜連では、5日間に渡り毎日異なる課の現場に同行しました。濃厚飼料だけではなく粗飼料の種子を取り扱ったりする飼料課、県の各地の獣医師さんなどに薬品や器具などを届ける薬品資材課、畜産振興課では子牛市場の視察、最終日には枝肉の販売を行う販売課の方々と共に行動をしました。

職員の方々は誇りややりがいを持って仕事をしておられ、どんな些細な質問でも快く回答してくださる人たちでした。最初から最後まで緊張してばかりでしたが、良いインターンシップ先に恵まれたと思います。

県畜連での研修を通して感じたこととしては、現場は大学の座学では学びきれない場所であるということでした。研修の中で、子牛市場や畜産流通センターなどこれまでは行ったことのない所にも訪問させていただきましたが、そこで経験したものは決して足を運ぶまでは分かり得ないものだったと私は思います。足を踏み入れ、見たり、触れたりするということがどれほど大切なのかを痛感しました。同時に、私が知らなかったのは地元の畜産現場だけではなく、今学びを得ている畜産県の鹿児島島の現場すらほとんど知らなかったのだと認識させられました。加えて、県畜連は畜産農家さんを支援することで生まれた利益を間接的に得る仕事だと知り、一括りに畜産の現場と言えども様々な方面から人々が現場に関わることでそれが成り立っているのだということを実感しました。

今回の研修は自分の中での課題や、これから何をどう学んでいこうかと考える良い機会となったと思います。私のインターンシップ研修は今後の自分にとってとても実りのある経験となりました。



「インターンシップを終えて」

食料生命科学科 食環境制御科学コース
植物栄養・肥料学研究室
学部3年 木村 仁美

私は2023年8月29日、30日、鹿児島県庁農政部農村振興課のインターンシップに参加しました。参加した目的は、鹿児島県内の農地に対しての取り組みや、県庁技術職の仕事内容について学びたいと思ったからです。また、自分で調べた上で実際に体験することで、公務員の仕事をより深く理解できると思いました。

この2日間は農村振興課の事業を学び、仕事の一部を体験させていただきました。農村振興課では主に農地利用の審査や農村づくり推進、農地中間管理事業、中山間・鳥獣被害対策、農業振興地域制度という5つの農村振興活動を行っています。具体的に農村づくり推進では水土里サークル活動シンポジウムの参加や課題解決に取り組む農村集落との意見交換を行っています。県庁での仕事以外に実際の現場に赴いたり、農地所有者さんと耕作者さんとの中間管理を行ったり、県民と直接関わって仕事をされていました。職員の方との質疑応答では、一般職や技術職の仕事内容だけでなく、離島勤務や職場の雰囲気など調べた内容以上のことを知ることができました。配属先が数年で変わるため、新たな人間関係を作る必要がありますが、色々な職を体験し、自分のキャリアを高めることができるという魅力を感じました。

最も印象に残ったことは、中山間・鳥獣被害対策として捕獲わなの作成を見学・実施したことです。くくりわなや箱わなは設置にある程度力がいり、わな設置しても警戒されてすぐには捕獲できないことを知りました。鳥獣を捕獲するまで根気強く待つ忍耐力や、地域で連携する際のコミュニケーション力が重要であると学びました。

今回のインターンシップでは、自分が将来どの仕事に、どういう感じに働きたいか想像して、仕事に触れる機会となったと思います。この経験をバネにして、学びを深めて活躍できるように努力していきたいと思えます。最後になりますが、ご多忙中にもかかわらずお世話になった方々に感謝申し上げます。



「インターンシップを振り返って」

農林環境科学科 森林科学コース
森林計画学研究室
学部3年 湯淺 敬太郎

私は2023年の8月末に熊本県庁で開かれたインターンシップに参加しました。熊本県庁のインターンシップは各職種や振興局ごとで分けられており、私は林業職、農林水産部森林局で開かれるものに参加しました。インターンシップは全5日間の日程で行われ、森林局内の各課の仕事や現場を1日ごとに体験、見学するような形でした。また、本庁内に設置されている部署だけでなく森林や林産物の試験研究を行う機関であり、県内企業への技術開発支援などを行っている林業研究・研修センターの見学も1日行いました。

1日ごとに違う部署を見学した感想としては、同じ林業職内だけでも業務が大きく分けられていることに衝撃を受けました。また、本庁での説明を受ける時間も勉強になりましたが、建物内だけでなく災害現場やその対応、対策を行った場所を実際に見て回りながら仕事についての話を聞くことができたことが貴重な体験になりました。特に熊本は近年豪雨による土砂災害の発生件数が多かったため、崩壊した土砂等が未だに残っている現場の雰囲気をより深く感じることができました。加えて、移動時間にはそれぞれの職員さんから見た仕事のことや森林のことや就職してからの生活についても詳しく聞くことができ、県庁全体のことから個人から見た仕事まで色々な視点からの意見を知ることができました。

以前から地方公務員については興味があったためある程度の知識は持っているつもりでしたが、5日間のインターンでさらにはっきりとしたイメージを得ることができました。特に林業分野は自然を相手にすることも多いため、その県やその地方ごとの特徴や問題としていたことを知れたのも良い機会になりました。今回のインターンで得た知識を意識しつつ、学生生活に活かしていければと思います。

介護体験記



「介護体験を終えて」

食料生命科学科 食品機能科学コース
生分子機能学研究室
学部3年 久保 未結

中学校の教員免許を取得するにあたって、夏休み期間中に介護等体験実習を行った。今回、大学の近くにある「デイサービスおたふく郡元」という施設で9月4日～8日の5日間お世話になった。今回の実習では、職員の方が学生である筆者に非常に多くの経験や知識を教えて下さった。

介護等体験全体を通して感じたのは、イメージと現実のギャップである。まず、実習参加前の筆者は、「デイサービス」という施設に対して元気な高齢者が通う認知症予防をしてくれる施設であると思っていた。一般的にも、レクリエーションや手遊びをして楽しんでいる高齢者がいる施設というイメージなのではないかと思う。しかし、実際に行ってみると、健康な人など一人もいなかった。実習の中で、高齢者の方と話す機会があったが、すでに認知症を発症していて、数秒後にはまた同じ内容の話をする人、上手く言葉が話せない人、1人ではお風呂に入れない人、車いすの人など様々な病気を抱えている人がいた。筆者は、初めてこのような方々と関わり、イメージとのギャップもあったため、実際に何を話せばよいのか分からなくなり戸惑ってしまうこともあった。

そして、高齢者1人1人の抱えている病気はもちろん、性格、趣向などの違いに合わせて、適切なアプローチがされていた。1つ1つの仕事が意味のある仕事で、塗り絵を見て病気の状況、今日の気分の様子を見たり、1人暮らしの人にはトイレから1番遠い席にすることで少しでも歩く距離を伸ばして筋力をつけさせたり、病気のレベルにより話が合う合わないを考慮して会話が弾むように同じテーブルのメンバーが決められていたりした。職員の方に説明してもらうまでは全く気づけなかった。

今回の実習を終えて、介護の仕事についてもっと知りたいと思ったし、非常にやりがいのある仕事であると思った。また、ここで経験したことは学校教育でも生かせると思う。



「介助技術の学びと実践について」

農林環境科学科 地域環境システム学コース
環境教育学研究室 (附属演習林)
学部3年 永原 拓也

特別養護老人ホーム「睦園」にて5日間の介護体験をさせていただきました。介護体験記では、介護体験を通じて学んだことを2つ紹介します。

1つ目は利用者様の「残存機能」を発揮させる介助の方法について学びました。残存機能とは、残された身体機能や認知機能のことを示します。利用者様の中には「失語症」や「難聴」の方がおられ、発話によるコミュニケーションを取ることができない方がおられました。しかしながら、利用者様が「失語症」であっても、表情やうなずきなどの「非言語コミュニケーション」によって交流を深めることができると実感しました。実際に、失語症の利用者様と会話による意思疎通は難しくても、「チラシを用いた箱作り」を一緒に行い、「アイコンタクト」や「うなずき」のような非言語コミュニケーションによって利用者様と交流を深めることができました。たとえ、利用者様の「発話」や「聴力」という機能がなくなったとしても、工作作業やレクリエーション活動などで「うなずき」や「顔の表情を出す」という小さな意欲を引き出させる支援というの、介助になりうるのだと実感しました。また、職員から「筆談」のコミュニケーション介助についても教えていただきました。

2つ目は、介助の実践を行えたことです。実際に、車椅子を移動するときは利用者様に「前に進みます」というような「移動前の声掛け」を行うことで、利用者様の不安を軽減することができました。また、入浴者移動介助での衣服着脱では、入浴後の着衣にてズボンを上げたいときに「手すり」に利用者様の手をつけて立ってもらおうと着衣がしやすいということを、実践を通して学ぶことができました。その他にも、認知症の利用者様に対する「傾聴」の実践もできました。

以上より、介護体験を通じて、介助が必要な人に対して適切な支援ができるように、介助技術について学習と実践を積んでいこうと考えるようになりました。

留学体験記



「米国への研究留学と国際学会を経て」

農林水産学研究科 農林資源科学専攻 畜産科学コース
家畜育種学研究室 (食肉科学研究室)
修士2年 萩之内 竹斗

コロナ禍による渡航禁止。私が留学のために休学届を大学に提出した直後に発令された一報である。万全の体制であったことに加え、意味のない休学をしなければならなくなったことで、失意に沈んだことを今でも鮮明に覚えている。結局2年が経ち、渡航許可がおりて私の10ヶ月の米国留学生活は始まった。幸運なことに、半年間の休学を行ったことで、在学期間中に留学へと行くことが可能になったのである。

いざ留学が始まると、YouTubeで見たキラキラとした夢の留学Lifeはなく、ただひたすら異文化に囲まれながら、現地の大学で研究に没頭する日々であった。生活に慣れるまでは言葉の問題だけでなく、コロナによる過激化したアジア人差別から命の危険を感じることもさへあり、日本の恵まれた環境が強く心に沁み込んだ。しかし、生活様式にも慣れ、言語の壁を克服してしまえば、多種多様な研究背景や価値観を持った人々との議論を交わす日々で、研究に対する思いや熱量が刺激され続けた。論文引用数を稼いで永住権取得を目指している留学生も数多く、周囲の学生達の研究熱意に圧倒される毎日でもあった。

留学中に研究成果発表の為にアメリカとイタリアで開催された国際学会で2回発表させていただく機会を得た。そこで特に印象的であったのは、ロシア国籍とウクライナ国籍の2人の学生が、研究に関して熱心に、そして楽しそうに議論していた姿である。国間の問題に関係なく、本質的な議論を行うことができ得る研究の美しさに気付かされた瞬間であった。また、私自身、食に関する研究は、違う食文化の人々へ伝えても意味が無いのでは？という考えを持っていたが、文化が違うからこそ予期せぬ意見が数多く降り注ぎ、発想や視野の広がりを感じられ、世界へ発信する必要性を再考する良い機会にもなった。

留学や国際学会の経験は、国際的な研究者へと成長する重要性を強く認識せられるものであった。理想の研究者を目指し、今後も精進したい。



「タイの好きなところ」



農林水産学研究科 農林資源科学専攻
植物生産科学コース 熱帯作物学研究室
修士1年 藤本 夏央

2022年8月から2023年6月までタイのカセサート大学へ協定校派遣留学し、現地では研究活動をしておりました。本稿では現地の生活や文化に触れて留学生生活を振り返ります。

タイの好きなところは食べ物が美味しい点です。タイには屋台文化があり、屋台で手作りの食べ物を買って食べる人が大半です。留学中はほとんど自炊することなく屋台でご飯を買って寮に持ち帰って食べていました。毎日お祭りの様でした。お気に入りの市場が開く曜日は研究のモチベーションが高く、夜ご飯のために頑張れました。

またタイ人の穏やかな国民性も好きでした。タイにはマイペンライ精神というものが存在しており、日本人の私の感覚からすると「絶対大丈夫じゃないでしょ」と思うようなトラブルが起こっても、笑いながら「マイペンライ (大丈夫)」と言います。その光景がとても可笑しく、深刻に受け止めていた自分が馬鹿らしくなります。そのような場面に何度も出くわすうちに、私が如何に物事を深刻に捉え神経質になる癖があったのか気付かされました。例えば、日本人は時間厳守ですが、タイ人は必ずしもそうとは限りません。相手が約束の時間に大幅に遅れると待ちくたびれることもありますが、笑顔で「大丈夫だよ」というのがマナーです。タイ人は何があっても絶対に怒りません。怒りを表に出すのは彼らにとっては下品なことなのでしょう。この文化は政治的緊張感が高まりつつある今の国際社会においてとても大事だと思います。マイペンライ精神を持つ微笑みの国だからこそ、タイは「王国」を維持してきたのかもしれない。留学生活の中でタイ人の価値観にた

くさん触れることができ、柔軟に物事を考えられるようになりました。

本留学に際してJASSOの海外留学奨学金を賜りました。また、事前準備から帰国するまで鹿児島大学留学生係の方々、担当教員、現地の先生方、家族や友達などたくさんの人に支えていただき感謝申し上げます。



編集後記

今年、「新型コロナウイルス感染症」が感染症法上の第5類に移行され、授業や生活もコロナ前に戻りつつあります。これは良かったのですが、世界では観測史上一番暑い夏（6～8月）で、日本でも1898年以降、最高気温の夏だったそうです。農場にいる者としては、ここまで暑いと作物の生育が気になるのは当然です。全国的には、かなり、農作物への影響も大きいのですが、農場の作物は、品質は別にして、台風もなく、すくすくと育っているように見えます。私は熱帯農業が専門で、熱帯産のヤマノイモを栽培していますが、茎と葉は、過去30年の栽培経験で、一番旺盛に育っていると感じています。サツマイモのようなツルボケはありませんので、収穫が楽しみです。これこそが南に位置する農学部農場教員としての大きな喜びにほかなりません。

（文責 附属農場 遠城 道雄）

鹿児島大学農学部 あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目21-24

TEL・FAX 099(285)8537

e-mail(aratakai@aratadousokai.org)

振替口座 02010-2-876

事務局の業務日 月・水・金(10:00~16:00)

印刷所 株式会社鹿児島新生社印刷
住所 鹿児島市七ツ島1-3-21
TEL 099-261-0111
FAX 099-261-3100
E-mail kagoshima@shinsei-p.co.jp



高隈演習林での大学院野外講義
(森林科学基礎特論・令和5年5月)



ノウサギ被害を受けた苗木のサイズ測定
(高隈演習林・育林学実習・令和5年2月)



高隈演習林実習で伐採した杉の搬出 (令和5年10月)

教育と研究の森
鹿児島大学農学部附属演習林



高隈演習林における杉伐採実習（令和5年10月）